

高津区おはなしアーカイブ

●三田 久幸 (みた ひさゆき)さん

昭和7年生まれ 83歳

川崎市高津区上作延在住



◆ご自身やご家族のことなど

私は上作延で生まれ、育ち、今日までずっと上作延で暮らしております。

女4人、男4人の8人兄妹の次男でした。女女女男男（私）男男女という順番です。長女は大正生まれで91歳で亡くなりましたが、次女は今90歳で元気しておりますよ。

父はずっと農業をやっておりました。

昭和7年、私が生れた頃は、まだ橘樹郡向ヶ丘村字上作延という地名でした。そのころはまだ民家もまばらで、砂利道を牛馬車が通る音が聞こえ、田んぼには鷺が飛んできました。田んぼの間をぬって遠くに平瀬川が光っているのが見えてね、朝霧に霞んでいる様子などは、まるで水墨画みたいな見事な景色でした。

6歳の時、置いてあった荷馬車で友だちとふざけていて、落っこちて右腕の骨を折ってしまったことがありました。あの痛さ、折れた腕の重さは忘れられないですね。

リヤカーに乗せられて溝口の鈴木接骨院に行っただんですが、リヤカーの振動が響くのが痛くて我慢できなくなって、途中からおんぶしてもらいました。子どもといっても随分重かったでしょうねえ。治るのに2ヶ月ほどかかりましたけれど、後遺症もなく、無事に小学校に入学することができました。

◆小学校時代の生活

小学校は向丘尋常高等小学校に通いました。昭和16年には川崎市向丘国民学校と名前が変わりましたがね。

低学年の間は男女混合クラスで、1クラス60人くらいでした。3年生からは男組、女組に分かれていました。

登下校の時は上級生に率いられて集団で通っていました。着物を着て、親の手づくりの藁草履を履いて、カバンを肩からかけてね。カバンのない子は風呂敷包みを斜めに背負っていました。道は砂利道で、低学年の子の足だと1時間近くかかっていたねえ。

その頃はご飯を炊くのに藁を燃して炊いていました。

◆子どもの頃の遊び

遊びはね、自然がいっぱいでしたからね、野山や畑を走り回って、そりゃあいろんなことをして遊びましたよ。

初夏になると山イチゴやタワラグミ、クワの実などが採れて。クワの実など、口の中が黒くなるほど食べましたね。

暑い盛りの頃は、田んぼに水を引くための堰に飛び込んで泳いだりもしました。

秋になって稲刈りが終わると、田んぼがよい遊び場になりました。地面がふかふか柔らかくなっているのです、相撲などで転んでも痛くなくて具合がいいんです（笑）。

また、稲藁ぼっち（脱穀が終わった藁をトンガリ帽子のように積んだもの）の周りでかくれんぼをしたり。

冬はスキーもしましたね。スキーは孟宗竹を切ってきて自分で作りました。妹の子守りをしなくちゃいけませんでしたから、おぶって滑ってました（笑）。

暗くなるまで遊んでいて叱られたこともありましたね。

◆戦争が激しくなって

小学校高学年の頃には、物品や食料も乏しくなり、戦争が激しくなっていることが感じられました。6年生の頃には、空襲警報が出されることも増え、そのような時には下級生をつれて下校していました。

自分たちより年上の高等科の者は、学徒動員で、近くにあった日本ヒューム管の工

場で働いていました。本来の工員さんたちは皆戦争に行っておりましたからね。

学校の昼休みに先輩たちに会いに行ったことがあったんですが、塀越しに見た先輩の顔は皆黒く汚れていて…お国のために大変な仕事をしているのだなど、思いました。

やがて空襲は一段と激しさを増してきました。何故こんな田舎にまでと思いましたが、近くに62部隊の兵舎があり、溝口には日本光学の工場があり、下作延の七面山にはサイレンや高射砲の陣地がありましたからね。それで標的にされたのですね。

◆昭和19年5月25日の夜

昭和19年5月25日の夜、私は庭にいました。轟音がして、夜空を対照灯に照らされてB29編隊が通過しています。

ヒューー！ザーー！という不気味な音。「焼夷弾だ！」父の叫び声！物置に飛び込んだと同時に物凄い音がして吹き飛ばされました。土壁の煙がもうもうとする中、見上げると屋根に大きな穴が開いていました。

互いに呼び合いながら庭に出ると、母屋の屋根や庭のあちこちに炎が上がっていましたが、梯子をかけ、父が茅葺屋根の棟に掛けられた鎖につかまって、炎を叩き、払い、何とか無事に消火することができました。初めに掛けた梯子が届かなくて、転びながら長い梯子を取りに走りましたね。大混乱、必死でした。

焼夷弾は寒天状に固めた油が燃えながら

空から落ちてくる。おびただしい数が降ってくるのです。その寒天状の物が、まだあちこち至る所で燃えていました。

朝になり、憲兵隊や警察、消防の人たちが大勢来て、時限爆弾かもしれないからと検査していきました。その間は家に近寄れなくてね。夜までかかりましたが、無事でした。

物置の屋根の穴は、焼夷弾を束ねるための鉄板が落ちてきたためのようでした。



〈三田久幸氏筆：油彩「空襲」〉

◆戦況の激化

数日後には、下作延笹の原の民家に爆弾が落とされました。家もろとも家族5人が跡形も無く吹き飛ばされたのです。大きな樺の木に衣服や、遺体の一部と思われる断片が引っ掛かっている、あまりにも無残な光景でした。まさに、無残。たまらない、としか言いようのない心持ちでした。

昼夜を問わず爆撃は続き、夜には東京や横浜、八王子方面の夜空が炎で赤く染まっているのが見えました。

戦争は激化し、空襲のため寝不足が続き、労働も厳しくて疲労は限界でしたね。物資や食糧も乏しくなっていました。東京方面から食料を求めてやってきた人が、衣類を一枚ずつ食料と物々交換していました。そういうのを「タケノコ生活」と言っていました。気が毒な言いようですよ。

農家も供出制度があって、作付面積によって米を供出しなくてはならなかったんです。闇米に流す人もいたようですが、父はそういうことはできない人でした。そんな父を見て「誠実心」や「信念」の尊さというものを学びとったように思います。

◆そして終戦へ

昭和20年8月15日正午、天皇陛下のお言葉が放送されました。終戦の告知です。

私はその時友人と平瀬川で泳いでいたのですが、びっくりして家に飛んで帰りました。家でもこれからいったいどうなるのかと、皆動揺していました。

戦争が終わって、すべてが変わっていきました。学校制度も六・三制が実施され、新制中学校になりました。切り替えでずいぶん混乱もしましたが、何とか乗り越えて学校生活を終えることができました。

家業を継ぐことになり、農作に専念しながらも、近くのお寺の住職さんに学問を教えていただいたりもしていました。なにしろ戦時中は満足に勉強することなどできませんでしたからねえ。

◆農作業と出荷

父は若い頃、東京の農家に奉公して良い品作りを学んだのだと、よく話して聞かされたものです。ネギ作りが得意で、遠くから種を分けてもらいに来たり、作り方を聞きに来る人も多かったですよ。

出荷する野菜を洗うために、綺麗な小川をせき止めて、共同で使っていました。メダカやフナ、シジミなどがいましたね。

出荷先の市場は、東京渋谷の宮益、世田谷の中里、用賀、他に川崎などでした。朝、暗いうちに提灯をリヤカーにぶら提げて出掛けておりました。瀬田の坂や用賀の坂を越えると冬でも汗びっしょりでした。

当時も道路は舗装されていました。交通量が少ない時代で、電車も車も人も同じところを通行していました。

◆富士登山

父からはよく「人間は何でも経験しろ」しかし「手が後ろに廻ることだけはするな」と言い聞かされていました。

青年期になり、一度は富士山に登ってみたいくて、一日だけ農作業を休んで行かせてもらいました。

暑い盛りの七月、午前の畑仕事をすませしてから出発しました。友人と二人で、豆絞りのシャツに腹掛け、股引、足袋に草履、そして手には金剛杖という弥次喜多さながらのいでたちは、さすがに人目を引きましたね（笑）。八合目まで行くとさすがに肌

寒く、満員の山小屋の軒下で身を寄せてご来光の時間を待ちました。

東の空が薄赤くなった時に一気に登りつめ、ご来光を拝みました。天気もよく見渡す限りの雲海はまさに絶景でした。

金剛杖に焼印を受け、急いで下山し、午後からはまた農作業に励みました。

◆お祭り

地元青年団に入り、青年倶楽部に集まって神輿を磨いたり組み立てたりするうちに、すっかり祭りの魅力に取りつかれ、近隣の祭礼にも出向いたりして、すっかり“祭り男”になりました（笑）。

浅草の三社祭にも行きました。地元の者でなくては神輿を担ぐことはできないのですが、顔見知りの店に頼んで地元の衣装を借りて、浅草寺、仲見世通りを担いで回りました。勇壮な祭りで、最高の思い出です。

富士吉田の火祭りでは、道の両側にずらりと並んだ大きな松明が赤々と燃えて見事でした。露店が並び、人々の興奮も最高潮でねえ。あれほどのお祭りに参加できて“祭り男”の冥利につきますね。

しかし、いくら好きなこととはいえ、長時間の神輿担ぎで腰を痛めて、翌朝起き上がれなくてね。それでも車を運転して帰らなくちゃならないし、あの時は参りましたね。腰を浮かせて片足運転で、歯を喰いしばって何とか帰ってきましたけど（笑）。

帰宅して即入院、椎間板ヘルニアで一ヶ月半でした。今では笑い話の種ですがね(笑)。

◆農業から理容業へ

私は次男なのですが、兄が農業を継がず鳶職になったものですから、私が父を手伝っておりました。しかし、近隣の開発による農地の縮小や、時代の流れを見て、この地で農業を続けるのは厳しいのではないかと両親とも相談しました。

人々の暮らしも落ち着きを取り戻しつつありましたので、これからは身なりもかまひ、ファッションにも気を使うようになるだろうから、理容業がよいのではと考えました。それでも長年の家業を止めようというのですから、理容学校に通っている時に、1人で畑仕事をする父の姿が見えると胸が痛んだものです。

理容学校では若い人たちに囲まれての勉強でしたが、卒業の時には最優秀賞をいただき、また、学校に残って指導に当たらないかともお誘いいただきました。開業を目指しておりましたので、辞退させていただきましたがね。

◆結婚そして開業

昭和35年に結婚し、周囲の皆さんに盛大に祝っていただきました。そして挙式の1週間後に夫婦で理容店を開業いたしました。従業員も雇い、お客さんも日毎に増え

ていき、大変順調な有り難いスタートでした。

近在には理容店はまだなかったので、随分遠くからも来店してくださり、開店前から待っていてくださる方々もいて、夜中まで働き詰めということも度々ありました。年末などは夜中の12時まで営業し、それから新年の準備にとりかかっていましたね。従業員の里帰りは元旦の午後からでした。

東北からの集団就職も受け入れておりましたので、従業員も更に増えていました。若い子は沢山食べるのでね、食事の支度をする妻は大変そうでしたよ(笑)。

店舗も改築したり、二階建てに新築したりして、大きくなっていきました。

空いた土地には鉄骨の三階建貸店舗付きの建物を新築し、やっとひと山越えたような気がしました。

そのころの買い物などは、関本屋っていう酒屋があつて、その店でちょっとした食料だのタバコだのも売ってましたね。お肉や魚は御用聞きが来て注文したのを配達してくれていました。溝口に「恒川」っていう肉屋がありましたね。

◆家族が増えて

昭和36年に長男が、40年に長女が、43年に次男が生まれました。長男はサラリーマンになりまして、次男が理容店を継いでくれています。長女は嫁ぎまして、三軒茶屋に住まっております。

その間には色々な事がありましたよ。

長男が1歳の頃、父が交通事故で「今夜が山」とまで言われる重体で、みな覚悟していたのですが、幸いにも一命をとりとめたのです。本当に九死に一生でした。その後半年間入院して無事生還いたしました。父の強い生命力のお陰です。

長女が這い這いしていたころに、熱いやカンを倒して大やけどをさせてしまったことも辛い思い出です。運よく国立小児病院で診ていただくことができ、手術していただきました。一か月入院して親の顔も忘れられそうでしたが、無事ニコニコと母に抱かれて退院できました。

◆理容組合、区老連のこと

店のほうがやっと順調になったころ、理容組合のほうから役員にお声がかかりまして、辞退したのですが強くお勧めいただき、お引き受けしました。経理副部長、経理部長、高津支部長を経て、神奈川県下三十七支部長兼理事となって、どんどん重責になっていきました。

そのころ高齢になった父が床に伏せるようになり、交代で看病するのですが、夜寝ることがほとんどできませんでした。朝になれば店の仕事がありますので、どうにも寝不足となりましてね。役員会に行くのに電車で居眠りをして乗り過ごし、大遅刻をしたりもしました。それでも無理と判断し、役職を辞退させてもらいました。

父は昭和54年に、母は平成8年に亡くなりましたが、どちらも大往生でした。

◆老後はのんびりと

平成15年、店の後継ぎである次男と同居しました。その時に3階建ての店と住居を新築し、これからはノンビリできるかなとホッとしました。すでに73歳になっていました。

地元の老人会からお誘いがあり、加入しました。加入と同時に会長に任命されました。高津区老連では運動会や奉仕作業、市老連では川崎市民祭りで踊りの披露等の他沢山の活動を行っていました。良き先輩や良き友と出会うことができました。

平成23年、妻が脊髄狭窄症のため手術を受けましたが、その後歩行に支障をきたすようになったため、老人会の役職は辞して家庭を主とした暮らしをしています。

80歳の手習いで妻と共にパソコンを覚え、老人会の記録や毎月の会報を作って配布し、喜ばれています。

気がつけば83歳になっておりましたが、これからは老後の人生。理容店開店の時から苦楽を共にしてくれた妻と共に、のんびり過ごしていきたいと思っています。

(平成27年9月17日取材)